

ペスタロッシー研究の新動向

—— ペスタロッシー生誕250周年を手がかりにして ——

Neue Tendenzen von Pestalozzi-Forschung

— Aus Anlaß des 250. Geburtstags von Johann Heinrich Pestalozzi —

寺 岡 聖 豪

(Seigo Teraoka)

第四部 教育科

(1997年9月10日受理)

Johann Heinrich Pestalozzi ist seit fast zweihundert Jahren als einer der Großen gefeiert worden, als Nationalheld der Schweizer Geschichte und als europäischer Pädagoge: Lehrer, Erzieher und Klassiker pädagogischen Denkens. Man hat bisher derartig die Biographie von Pestalozzi als die Legend dargestellt. Dagegen hat man seit Jahren Rezeptions- und Wirkungsgeschichte Pestalozzis behandelt. Denn wir haben Pestalozzi nicht als einen legendären Pädagoge bewundert, sondern Pestalozzis pädagogischen Denken in den Kontext gestellt.

Dieser Aufsatz, der auf neueste Forschungen fußt, diskutiert es, wie man Pestalozzis pädagogischen Denken rezipiert hat und was für Rolle hat es in der Erziehungstheorie und Erziehungspraxis gespielt.

はじめに

「イフェルテンのすばらしいペスタロッシーから、ある運動が生じた。世界はやっと、その追放された者の言葉に耳をすませる気になった。ペスタロッシーたった一人の夢と思想から、教育を実現しようとする努力の時代が目覚めたのである」

(Spranger 1965, S.105)。これは、シュブランガーがペスタロッシー没後100年記念祭 (1927年, チューリッヒ大学) において述べたものである。この言葉から、ペスタロッシー (Pestalozzi, Johann Heinrich 1746-1827) の教育思想をもとにして、教育学の議論が19世紀から20世紀にかけて展開されたことは容易に想像できる。また、リートケによれば「ペスタロッシーの影響史はすでにペスタロッシーの理論が適切であったことを示す徴候ですらあった」(Liedtke 1979, S.170) という。この指摘によれば、ペスタロッシーの教育思想はそれぞれの時代において常に指針となっていたと思われる。それは、イザラエルの文献目録 (Israel 1903), フリードリッヒ (Friedrich 1996), トレーラー (Tröhler 1996), オスターヴァルダー (Osterwalder 1995, 1996b) による

ペスタロッシー研究動向の概観などを繙いても、明らかである。さらに、今日でも「ペスタロッシー学校」あるいは「ペスタロッシー通り」などが存在することから、ペスタロッシーのシンボリックな作用が大きいことは想像がつく。

しかし、ペスタロッシー生誕250年 (1996年) を迎えるにあたって、ペスタロッシー研究に転換が見られるようになった (Tröhler 1996, S.60) という。一概には言えないが、19世紀においてはペスタロッシーの教授法や人間学を受容することに力点が置かれ、ペスタロッシーの神格化が図られた。それに対して、近年、受容史あるいは影響史の側面から、ペスタロッシーの教育思想や教育実践を批判的に解釈するものが増えている。二巻本からなる『ペスタロッシー伝』の著者、シュタッドラーによれば、ペスタロッシーを「賛美する時代は終わった」(Stadler 1988, S.19)。そして現在、ペスタロッシー研究に求められているのは、ペスタロッシーの生涯と著作を時代や社会の背景的文脈において捉えることにより、批判的に分析することであるという。そこで、ペスタロッシーの影響史や受容史が今日のペスタロッシー研究において研究方法として採用されるようになった。このような研究関心の移動を反映して、ペス

タロッターの生誕250年に際して、「ペスタロッターの神話」と「ペスタロッターの脱神話化」という話題が今日のペスタロッター研究を支配するようになった (Hager 1996a, S.15)。これは今までのペスタロッター理解においては、ややもすると、ペスタロッターの教育思想や教育実践が過大評価され、ペスタロッター像が理想化されたことを意味する。墓碑に「すべてを他人のために行い、己のためには何事をも (なさず)」と刻まれたように、ペスタロッターの伝記は常に聖人伝や偉人伝として執筆されてきたのである。

従来、ペスタロッターはこのように神格化されたため、単に教育学の古典として参照されただけでなく、聖人の位置にまで高められた。そのため、ペスタロッターは反駁の余地のない立場に置かれ、「ペスタロッター神話」が形成された。このようなペスタロッター解釈に対して、近年、批判が強まっている。というのは、一般にペスタロッターについて知られていることと言えば、『隠者の夕暮』や『リーンハルトとゲルトルート』、『シュタンツ便り』の一節であり、「貧民教育家」などといったステレオタイプの理解でしかないからである。そこで、本稿ではこのような研究動向を踏まえて、ペスタロッターの教育思想の単なる再解釈や再考という枠組みを越えて、ペスタロッターの教育思想が歴史的にどのように受容され、どのような役割を果たしたのかを検討する⁽¹⁾。なお、ペスタロッターの教育思想がどのような側面から受容されたかを検討する際、次のように分けて考察を行う。まずペスタロッターが亡くなる1827年までの存命中の評価を概観する⁽¹⁾。次に、1828年以降の民衆学校教育学 (Volksschulpädagogik) における受容、とりわけペスタロッター生誕百年記念祭 (1846年) の意義を明らかにする⁽²⁾。続いて、19世紀末以降の学術的教育学 (Akademische Pädagogik)、大学教育学における受容、とりわけ『批判版 ペスタロッター全集』(Pestalozzi, Sämtliche Werke, Kritische Ausgabe, 1927 ff.) の編集と精神科学的教育学によるペスタロッター研究の意義を取り上げる⁽³⁾。そして、最後にこれらのペスタロッターの教育思想の研究史を踏まえて、最近、盛んに行われるようになってきたペスタロッターの教育思想の受容史・影響史の意義について言及する。

1 1827年までのペスタロッターの評価

はじめにペスタロッター存命中の評価について

素描しておく。

周知のように、ペスタロッターは小説『リーンハルトとゲルトルート』(1781年)によって、一躍ヨーロッパ中にその名を知られるようになった。同著は1781年11月までに「チューリッヒとヴィンターツールだけでもほぼ400部売れた」⁽²⁾ (B3-S.126)。また『白鳥の歌』によれば、「まもなく、あらゆる新聞がこの本に対する賛辞を載せた。そのうえ、あらゆる年報がそうした賛辞でいっぱいとなった」という⁽³⁾ (28-S.242, 十二—二一四)。このペスタロッターの回想はいささか誇張を含んでいると思われるが、ベルン経済協会は『リーンハルトとゲルトルート』の功績に対して、ペスタロッターに「最良の市民へ」と刻印された記念メダルを贈った (B3-S.139; Stadler 1988, S.19)。このように、ペスタロッターは小説家として成功を収めたが、『リーンハルトとゲルトルート』はペスタロッターが期待をかけた人々に意識や生活上の変化をもたらすことはなかった。つまり、ペスタロッターは、民衆がゲルトルートの儉約や経済的な思慮に学んで、自分たちの家庭や村の生活に応用することを期待したが、民衆の日常生活は何ら変わらなかったのである。

次に、教授法 (Methode) に関する評価である。ペスタロッターは教授を「心理化する」試みを『ゲルトルート児童教育法』(1802年)に纏めた。そして、ペスタロッターは自ら運営していたブルクドルフの学園の視察をフュースリー (Füßli, Johann Heinrich) を通じてヘルヴェチア小評議会に申請した。フュースリーは調査委員として、ベルンの教育局長、主席牧師イート (Johann Samuel Ith) と薬剤師ベンテリ (Friedrich Bentely) を任命した。イートは『ペスタロッターの学園とその新教授法に関する公務報告』(Amtlicher Bericht über die Pestalozzische Anstalt und die neue Lehrerart derselben) を1802年に提出するが、この報告書⁽⁴⁾では、ブルクドルフの学園の実態、ペスタロッターの教育思想並びに教授法の理論と実際を包括的に検討した。このなかで、イートは普通の小学校の倦怠さと、ブルクドルフの活気に満ちた学校生活との違いをはっきり認め、その理由を子どもの内にある諸力の活用や育成にあることを見いだした。すなわち、「子どもが学習する一切は、自己活動に基づく直観により、経験によって獲得される」と。

また、イートはこの教授法が「本質的に新しく、したがって真の発見である」と主張し、それゆえ「この教授法を、それが内的に優れているために

推挙し、それを促進し、人類のために、とりわけ多数の放任された人々のために、最も重要な福祉の一つとしてそれがあまねく採用されるように願うこと」を、自分の義務と感じた。イートはこのように、ヘルヴェチア政府がブルクドルフ学園を特別に保護するよう期待したのである。

ペスタロッcherに対する、この極めて好意的な報告によって、学園に財政的な保証が与えられ、国費によって教授法を学ぶために何人かの教師たちが派遣される手はずが整えられた。さらに、イートの報告書はドイツの主だった雑誌で論評されただけでなく、国際的にも大きな反響を呼んだ。イートの報告書はペスタロッcherの名をヨーロッパ中にあまねく紹介し、かつ有名にしたのである。

2 民衆学校教育における受容

次に、ペスタロッcher生誕100年記念祭（1846年）の意義を概観する。

その前に、まずペスタロッcherの教育思想の受容状況を知る上で、一つの目安となるコッタ版全集の読者層を見ておきたい。ペスタロッcher自身が直接、編集した著作全集として、コッタ版（1819年～1826年）がある。1818年にこの全集を予約した者として、リストには1400以上の個人と機関の名前が記載されている（26-S.201ff.）。予約者は圧倒的にドイツ語圏が多いものの、フランスやイギリスなどからの予約もあった。ここに、ペスタロッcherの教育思想の基本的な受容傾向を見ることができるだろう。ペスタロッcherの教育思想は生前、教授学者や教育改革家として国際的に非常に注目されていたのである。しかしながら、ペスタロッcherは没後、ほとんど忘れ去られた存在となった。ペスタロッcherの教育思想は早くも時代遅れとみなされ、スイスではわずかにジュネーブで追悼文が出されたに過ぎない（Tröhler 1996, S.61）。

ところが、生誕100周年（1846年）を迎える頃から、ペスタロッcherは再び脚光を浴びるようになった。その際、ペスタロッcherの教育思想は次の三点から注目されたと思われる。第一に「教員養成のための理念」、第二に「メトードによる教授の新しい秩序」（効果的な教授方法の作成）、そして第三に「民衆教育を人類の課題として把握し、それによって専門職倫理にダイナミズムを働かせる理念」として、注目されたのである（Oelkers 1995a, S.227）。

このような観点から、ペスタロッcherの教育思

想は受容されたというより、利用された。その代表的な人物の一人として、ディースターヴェーク（Diesterweg, Friedrich Adolph Wilhelm 1790-1866）を挙げることができるだろう。ディースターヴェークはペスタロッcherの精神を受け継ぐことを目指して、ペスタロッcher生誕100年記念祭を開催した。ディースターヴェークがペスタロッcherの生年を正確に知らなかったため、この記念祭は結果的に1845年と翌46年の二回、行われた。1846年の記念祭講演（「ペスタロッcherは何を望んだか、我々は何を望むか」）において、ディースターヴェークはペスタロッcherの教授法の功績を「合自然、直観、自己活動への鼓舞、自ら考えることへの鼓舞」（Diesterweg 1950, Bd.II., S.285）という四つの観点から説明した。まず第一に、合自然とは子どもの発達段階に応じた教授法を用いなくてはならないという原則である。第二に、直観は自分の眼で見て、自分の耳で聞いて、自分の経験を積ませるという意味で重視された。第三に、自己活動への鼓舞とは、内部から生じる自己活動によって、人は自律できるということである。第四に、自分で考えることへの鼓舞は、暗記や機械的な反復に対する批判である。また、ディースターヴェークは『教職教養指針』（第三版）において、『リーンハルトとゲルトルト』を「実践的な教師」の必読書として推薦している。

ディースターヴェークは、ペスタロッcherの教授法を様式化し、メトードを学校改革と国家発展の源泉と位置づけたのである。ディースターヴェークにとって、ペスタロッcherは民衆教育に取り組んだ先導者として注目すべき人物であり、絶えず教授法の改善に着手した教育改革者でもあった。その意味において、ペスタロッcherは教育者の模範とみなされたのである。しかし、ディースターヴェークが28歳のときの日記では、教授法に関して、これとは正反対の評価をしていた。当時のペスタロッcher教授法は「偽りのペスタロッcher主義」（After-Pestalozianismus）として、次のように評価されている。「かわいそうな子どもたちよ、おまえたちは今なお、ペスタロッcherの文字によって悩まされ、苦しめられている。おまえたちの先生が金を鉱滓から分離するまで、どれだけの時間がかかることか。現世の救済をメトードによって期待する者は誰でも、道に迷うのだ」（Aus Adolph Diesterwegs Tagebuch, S.4）と。ディースターヴェークは、ペスタロッcherの教授法が当時、実践において成功を収めて

いないと指摘したのである。また、ディースターヴェークは「ペスタロッチャー学校の今日の立場と現代の偽りのペスタロッチャー主義の活況」(*Der jetzige Standpunkt der Pestalozzischen Schule und das Treiben der After-Pestalozziner unserer Zeit*, 1829) という論文において、次のようにも述べている。「ペスタロッチャーは至る所で、自分の理念やメトデーについて言及している。それに対して、我々はこの理念とメトデーについて満足のいく、明瞭な、しっかりした説明を求めているが、これは徒労に終わっている」(Diesterweg Bd.1., S.516)。そして、メトデーの構成は「カオス」であると結論づけられた。

このように、ディースターヴェークのペスタロッチャー受容には矛盾が認められるが、それはディースターヴェーク自身の教育実践への関与によって生じたと思われる。ディースターヴェークは初め、ペスタロッチャーの教授法に疑問の眼を向けていた。しかし、ディースターヴェークは教員養成の責任ある立場を務めるなかで、教会や行政に対して教職の独立性を高めようとした。そのために、ディースターヴェークは生誕100年祭の記念講演において、ペスタロッチャーを教職のシンボルとして利用したのである。つまり、ディースターヴェークはペスタロッチャーを教授原則の発見者、民衆学校の恩人であると評価した。そして、ディースターヴェークも自らペスタロッチャーを模して、貧民の子どものための福祉施設として「ペスタロッチャー財団」を設立するなどの活動を行い、「第二のペスタロッチャー」と呼ばれるようになった。

続いて、同じく教員養成の立場から、ペスタロッチャーの教育思想を取り上げた人物として、モルフ(Morf, Heinrich 1818-1899)を挙げておきたい。モルフはとりわけ『ペスタロッチャー伝』の著者として有名であるが、ペスタロッチャーの教育思想を基礎にした教育実践家でもあった。この点で、ディースターヴェークとモルフは共通している。両者はともに大学に籍を置いた教育学者ではなく、師範学校の校長として、民衆学校教育学の側面から、ペスタロッチャーに注目したのである。

モルフもまた1846年、チューリッヒでのペスタロッチャー生誕100年祭において、記念講演を行うが、この講演の準備をきっかけに、ペスタロッチャーの教育思想を本格的に研究し始めたようである⁽⁵⁾。モルフは1852年から60年にかけて、ミュンヘンブーフゼーの師範学校長を務めるが、そこでのペスタロッチャーに関する彼の講義は多くの教

育者の関心を引いたという。師範学校長を辞職した後、モルフは1861年からヴィンタートゥールの孤児院長に選ばれ、93年まで孤児院で活動した。この孤児院は、ペスタロッチャーの求めた家庭的な愛情によって運営されたという。そして、1863年から4回に分けてヴィンタートゥール救済協会『新年誌』に寄稿したものをもとにして、『ペスタロッチャー伝』を執筆した。その第一巻は、1868年に出版された。そして、長い間、続編は待たれたが、16年間に及ぶ情熱的な資料収集によって、ようやく第二巻と第三巻は85年、第四巻は89年に出版された。このモルフの『ペスタロッチャー伝』の特色は、民衆教育史の観点から民衆学校におけるペスタロッチャーの教授法の実践的意義やその社会的影響を考察したことにある。また、ペスタロッチャーの教育思想の発展をペスタロッチャーの学園の興亡の歴史において捉えたことにもその特色がある。さらに、モルフの伝記は教授学者だけでなく、社会的教育学者としてのペスタロッチャーに光をあてた点にもその特色が認められる。そしてモルフは、ゼイファルト(Seyffrath, Ludwig Wilhelm 1829-1903)がペスタロッチャー全集を編集する際、貴重な助言を与えるなどの協力をしたという。このようなペスタロッチャー研究上の功績によって、モルフは1896年1月12日、ペスタロッチャー生誕150年祭で記念講演を行い、チューリッヒ大学から名誉博士の学位を授与された。

また、ペスタロッチャー生誕150年の記念祭はスイスでは、国家的な行事となった。というのは、ペスタロッチャーの生誕日が祝日となり、ペスタロッチャーはウィリアム・テルやウルリッヒ・ツヴィングリーといった歴史上の偉人や伝説的な人物のなかに数え入れられたからである。言い換えれば、ペスタロッチャーはスイスの国民的統合のシンボルとなったのである。モルフがペスタロッチャーを近代民衆学校の創設者であり、近代的な社会的教育学の創設者として評価したことは、当時の人々に対するアンガージュマンを促すものとして教育的に働いたと考えられる。その意味で、ペスタロッチャーは没後も「国民的な信念への教育」というスローガンのもとで、教育的な役割を果たしたのである(Tröhler 1996, S.61ff.)。

3 19世紀末以降の大学教育学、学術的教育学における受容

ペスタロッチャー受容は総じて、19世紀においては民衆学校教育学の立場から行われたが、19世紀

末からは学術的教育学からも、ベスタロッターへの着目が行われるようになった。その代表的な例として、ドイツのナトルプ (Natrop, Paul 1854-1929) を挙げることができるだろう。ナトルプは1885年から41年間、マールブルク大学で哲学教授を務め、1887年より「哲学月刊誌」の編集者となった。ナトルプは観念論の立場から、プラトンとカントの哲学を結合させ、プラトンの理想主義を目指していたのである。

また教育学では、ナトルプはベスタロッターを高く評価し、ヘルバルト派への対抗意識から、カントの批判的方法によってベスタロッターの復活を唱えた。ナトルプはこうにプラトン、カント、ベスタロッターの三者を基礎として、独自の教育学を構築しようとしていたのである。

19世紀を通じて、ベスタロッター像は一般的には教授法学者であった。それに対して、ナトルプはドイツ理想主義の立場から、ベスタロッターの思想を哲学的、体系的に解釈することに努めた。とりわけ『ベスタロッターの理想主義』(1919年)では、カントの哲学によって、ベスタロッターの思想を体系化しようとした。同書はベスタロッターの『人類の発展における自然の歩みについての私の考察』をカントの自律思想と関連づけて、そこに近代的な思想の契機を見いだそうとしたのである。

次に、『批判版 ベスタロッター全集』の編集について触れておきたい。『批判版全集』は、ベスタロッター没後百年に当たる1927年から、スイスにおいて編集され始めた。この『批判版全集』には、ドイツ側からブヘナウとシュブランガー、そしてスイス側からシュッテットバッハーが責任編集者として参加した。この編集者たちはまた、『ベスタロッター研究』の編集・刊行にも加わっていた。同誌はベスタロッター研究にとって重要なフォーラムの場を提供するものである。また、『スイス教員新聞』の付録『ベスタロッターアヌム』——シュッテットバッハーが1922年から1952年まで、編集者を務めた——もまたベスタロッター研究にとって、貴重な議論の場を提供していた。

1927年の没後100年記念祭には、多くの著名な教育学者が学術的な論文を発表したことが注目に値する。彼らはそれぞれの論文において、ベスタロッターの活動を解明するとともに、普及させることに貢献した (Leonhard 1996, S.39ff.)。たとえば、雑誌『教育』(1927年)において、リットやノール、シュブランガーら、精神科学的教育

学者が、ベスタロッターの理念や精神的な立場を考察した⁽⁶⁾。そればかりか、彼らはベスタロッター研究を通して、1920年代の大学における教育学研究を学問的にリードしたと思われる。たとえば、シュブランガーはベスタロッター教育思想の特徴を『ベスタロッターの思考形式』として纏める一方、人間存在の理念型を「生の形式」に体系化した。また、ノールは、ディルタイの精神史と教育学の視野から「ドイツ運動」の地平と子どもの世界を示唆し、教育学を個人的な「関係」として体系化した。その際、シュブランガーやノールにとって、ベスタロッターは自分自身を意味する「教育学運動」の中心であり、出発点でもあった。こうして、教育学の学問的な基準はベスタロッターの権威によって基礎づけられた。その意味では、教育学にとって、「イフェルテンのすばらしいベスタロッターから、ある運動が生じた」(Spranger 1965, S.105) と言えよう。

また、『批判版 ベスタロッター全集』の発行によって、豊富な資料を入手することが可能となり、ベスタロッター研究のテーマは政治、宗教、哲学=人間学など、広範に論じられるようになったことも注目に値する⁽⁷⁾。この点は前述したように、19世紀のベスタロッター研究において、ベスタロッターの教授法と生涯に関するものが中心であったのに対し、そのテーマが広がったことを意味する。そして、このような研究主題の拡大によって、ベスタロッターの偶像化は回避され、研究対象から距離をとることができる可能性も生まれた。

おわりに

以上、ベスタロッターの教育思想の研究史を概観したが、最後に、ここで得られた帰結を次のように纏めておきたい。

ゲーテは文学において、教養小説のモデルを確立した。また、カントの問題設定はドイツ哲学において、ずっと追求されたテーマであった。ベスタロッターもまた両者と同じように、これまでしばしば多くの人々によって参照されてきた。では、ベスタロッターは教育(思想)史において、どのような足跡を残したのであろうか。とりわけ、ベスタロッターは教育実践の上で何度も失敗しているにもかかわらず、後世の人々によって参照され続けたが、その背景には、どのような意図があったのだろうか。

本稿の考察を通して明らかとなったのは、以下

の通りである。18世紀の民衆学校では教理問答書 (Katechismus) とわずかの読み・書き・計算を機械的に暗記法で教えていた。そのような状況に対して、ペスタロッチーの教授法と学園での実践は国際的にも注目を集め、教育上の発見がなされたかのように、驚きをもって受けとめられた。そして、ヨーロッパ諸国やアメリカではペスタロッチー信奉者が生まれ、多くの人々がペスタロッチーの学園を訪問し、各地でペスタロッチーの理念や方法を普及させることに努力した。ペスタロッチーの教育思想は19世紀においては教職の専門性を基礎づけるために注目されたのに対して、20世紀においては教育学の自立性を高めるために引き合いに出されたのである。言い換えれば、ペスタロッチー研究はそれぞれの理論的、実践的な立場を反映しており、それぞれの教育上の主張を補強するために、ペスタロッチーの教育思想を参照した。この反映と補強によって、ペスタロ

ッチー像が作り出され、ペスタロッチーの偶像化・神話化が図られた。それゆえ、ペスタロッチーの教育思想を考察するためには、確かにテキストに即して理解を進めることは重要ではあるが、ペスタロッチーの教育思想が生まれた背景的文脈の解明もまた等閑にしてはならない。これがペスタロッチー生誕250年を一つの契機にして、ペスタロッチーの影響史や受容史が盛んに行われるようになった背景と考えられる。それゆえ、ペスタロッチー生誕250年は単なるペスタロッチーの教育思想の「再考」ではなく、今までのペスタロッチー研究の枠組みを根底から問い直す作業と言える。したがって、この影響史や受容史は、ペスタロッチーの教育思想と時代・社会的文脈との関係を主題とするために、ペスタロッチーの教育思想を絶対視するものではない。その意味では、ペスタロッチー神話の解体を促すものであるかもしれない。

注

- (1) ペスタロッチーの影響史または受容史として、マルティン (Martin, E.) による19世紀のバーゼルランドシャフト州におけるペスタロッチーの遺産を研究したもの、ヒンツ (Hinz, R.) によるプロイセン改革期におけるペスタロッチー教育学の受容を考察したもの、大崎功雄によるプロイセン教育改革期におけるペスタロッチー教授法の導入過程を分析したもの、そしてオスターヴァルダー (Osterwalder, F.) による19世紀におけるペスタロッチーの影響史を詳細に検討したものなどがある。
また昨年、盛大に行われたペスタロッチー生誕250周年の記念式典 (1996年1月14日) と学術シンポジウム (1月15日～17日) はドイツ語圏の一般新聞紙上においても取り上げられ、そこでもペスタロッチーの影響史が論じられた (Flitner; Hagenbühle; Klenner; Oelkers)。
- なお、本稿ではペスタロッチーの教育思想を批判的に読み解く必要性を主張したエルカース (Oelkers, J.) とオスターヴァルダーの見解を参考にした。
- (2) ペスタロッチーの書簡集から引用する際、たとえば書簡集第三巻126頁は (B3-126) と表記する。
- (3) ペスタロッチーの全集から引用する際、たとえば批判版第28巻57頁、邦訳全集第12巻9頁は (28-57, 一一九) と表記する。
- (4) 以下のイートの報告書はモルフの『ペスタロッチー伝 第二巻』(11頁以下、邦訳二頁以下) の記述をもとにして纏めた。
- (5) モルフの略歴については、『ペスタロッチー伝 第一巻』(一八頁以下) の記述をもととしている。
- (6) ペスタロッチー没後100年記念祭を契機に書かれたものとして、次のようなものがある。Litt, Theodor: Pestalozzi, der Mensch und die Idee. In: *Erziehung*. Leipzig 1927, 2.Jg. Nohl, Hermann: Die geistige Welt Pestalozzis. In: Ebd. Spranger, Eduard: J.H. Pestalozzi. In: Ebd.
- (7) ペスタロッチー研究のテーマの広がりを示す業績としては次のようなものを挙げるができる。Wernle, Paul: *Pestalozzi und die Religion*, Tübingen 1927. Bachmann, Werner: *Die anthropologischen Grundlagen zu Pestalozzis Soziallehre*, Zürich 1947.

参考・引用文献一覧

引用に際しては、本文中に著者名、出版年、ページ数のみを記した。

Diesterweg, Friedrich Adolph: *Aus Adolph Diesterwegs Tagebuch 1818-1822*. Hrsg. von Bloth, H.G., Frankfurt am Main, Berlin und Bonn 1956.

- Diesterweg, Friedrich Adolph: *Schriften und Reden*, Hrsg. von Deiters, H., 2 Bde., Berlin und Leipzig 1950.
- Diesterweg, Friedrich Adolph: *Sämtliche Werke*, Bearb. von Hohendorf, R., 17 Bde., Berlin 1963-1990.
- Flitner, Andreas: Legendärer Pädagoge: Schweizer Forscher holen ihren Nationalhelden Pestalozzi vom Sockel. In: *Zeit* Nr.3., 12. Januar 1996.
- Friedrich, Leonhard: Zur Erforschung der Pädagogik Johann Heinrich Pestalozzis. Geschichte-Stand-Perspektiven. In: *Pädagogische Rundschau*, 50.Jg. 1996, S.35-58.
- Hager, Fritz-Peter: Zur Problematik der "Entmythologisierung" Pestalozzis. In: *Neue Pestalozzi-Blätter*, 2.Jg. 1996a, S.15-17.
- Hager, Fritz-Peter, Tröhler, Daniel (Hrsg.): *Pestalozzi-wirkungsgeschichtliche Aspekte*, Bern, Stuttgart und Wien 1996b.
- Hagenbühle, Walter: "Der verlorene Unschuld der Schule; 250 Jahre Pestalozzi-Mythos sind genug". In: *Neue Zürcher Zeitung* vom 6./7. Januar 1996.
- Hinz, Renate: *Pestalozzi und Preußen; Zur Rezeption der Pestalozzischen Pädagogik in der preußischen Reformzeit (1806/07-1812/13)*, Frankfurt am Main/Haag und Herchen 1991.
- Israel, August: *Pestalozzi-Bibliographie*, 3 Bde., 1903 Berlin. (Nachdruck, 1970 Hildesheim und New York).
- Klenner, Wolf: Gescholtener Pestalozzi. In: *Frankfurt Allgemeine Zeitung*, 22. Januar 1996.
- Liedtke, Max: *Pestalozzi*, Hamburg 1968.
- (長尾十三二・福田弘訳『ペスタロッター』理想社, 1985年。)
- Liedtke, Max: Johann Heinrich Pestalozzi (1746-1827). In: Scheuerl, Hans (Hrsg.): *Klassiker der Pädagogik. Bd. 1., Von Erasmus von Rotterdam bis Herbert Spencer*. München 1979, S.170-186.
- Martin, Ernst: *J.H. Pestalozzi und die alte Landschaft Basel*, Liestal 1986.
- 宮崎俊明「ペスタロッター研究の変遷と新動向——主題と方法論をめぐる六形態——」, 『教育学研究』第四八巻第二号, 1981年。
- Morf, Heinrich: *Zur Bibliographie Pestalozzi's; Geschichte der Volkserziehung 4 Bde.*, Winterthur 1864-1889.
- (長田新訳『ペスタロッター伝 全四巻』岩波書店, 1985年(復刻版)。
- Natrop, Paul: *Der Idealismus Pestalozzis*, Leipzig 1919.
- Oelkers, Jürgen: Der Pädagoge als Reformator; Pestalozzi in Deutschland 1800 bis 1830. In: Oelkers, Jürgen, Osterwalder, Fritz (Hrsg.): *Pestalozzi-Umfeld und Rezeption*, Weinheim und Basel 1995a.
- Oelkers, Jürgen: Diesterweg und Pestalozzi; Rezeptionsgeschichtliche Bemerkungen zu einem schwierigen Verhältnis. In: Oelkers, Jürgen, Osterwalder, Fritz (Hrsg.): *Pestalozzi-Umfeld und Rezeption*, Weinheim und Basel 1995b.
- Oelkers, Jürgen: Mit Herz und Hand und ohne Kopf; Johann Heinrich Pestalozzi, die pädagogische Legende, war ein geborener Verlieher. In: *Frankfurt Allgemeine Zeitung-Beilage "Bilder und Zeiten"* Nr. 11, 13 Januar 1996.
- 大崎功雄『プロイセン教育改革研究序説』多賀出版, 1993年。
- Osterwalder, Fritz: Zu einem Problem der Pestalozzi-Forschung. In: Oelkers, Jürgen, Osterwalder, Fritz (Hrsg.): *Pestalozzi-Umfeld und Rezeption*, Weinheim und Basel 1995.
- Osterwalder, Fritz: Zum 250. Geburtstag Pestalozzis-rationale Argumentation oder Kult des Pädagogischen. In: *Zeitschrift für Pädagogik*, 42.Jg. 1996a, Nr.2., S.149-163.
- Osterwalder, Fritz: *Pestalozzi-ein pädagogischer Kult*, Weinheim und Basel 1996b.
- Pestalozzi, Johann Heinrich: *Sämtliche Werke*; Hrsg. von Buchenau, A./ Spranger, E./ Stettbacher, H., 1927ff. Zürich/ Berlin, 28Bde. (Kritische Ausgabe).
- ペスタロッター, 長田新編『ペスタロッター全集 全12巻』平凡社, 1959年。
- Pestalozzi, Johann Heinrich: *Sämtliche Briefe*; Hrsg. vom Pestalozzianum und von der Zentralbibliothek in Zürich, Zürich 1946ff.
- Spranger, Eduard: *Vom Pädagogischen Genius; Lebensbilder und Grundgedanken großer Erzieher*, Heidelberg 1965.

Stadler, Peter: *Pestalozzi; Geschichtliche Biographie. 2 Bde.* Zürich 1988/1993.

鈴木由美子「ペスタロッター研究の新たな地平——ペスタロッター生誕250年祭から——」。日本ペスタロッター・フリーベル学会編『人間教育の探究』第八号, 1995年, 59-77頁。

鈴木由美子「スイスにおけるペスタロッター研究の新しい動向」。所収, 日本教育学編『教育学研究』第六三巻第三号, 1996年, 329/330頁。

Tröhler, Daniel: Hauptströmungen und Tendenzen der Schweizer Pestalozzi-Forschung. In: *Pädagogische Rundschau*, 50.Jg. 1996, S.59-74.